

「北の交差点」20号 発刊に当ってのご挨拶

(財)北海道道路管理技術センター
理事長 竹田 俊明



当センターが発刊する技術情報誌「北の交差点」も、お陰様で今号が20号となりました。当センターの設立が平成2年6月、「北の交差点」の創刊が平成8年4月ですが、「北の交差点」は、概ね年2回のペースで発刊してまいりましたので、20号で創刊以来10年余を経過することとなりました。

この間、編集アドバイザー会議の座長として、ご指導ご協力を頂いた、北海道工業大学の笠原教授、北海道大学の加賀屋教授はじめ、編集アドバイザー委員として参画いただいた北海道開発局、(独)土木研究所・寒地土木研究所、北海道庁、札幌市等の関係各位、原稿執筆や取材にご協力頂いた各位、そしてご愛読を頂いた各位に対して、深く感謝とお礼を申し上げます。

さて、20号という節目に当り、折角の機会ですので、ここ10年の道路に関する動きや最近の当センターを取巻く状況などについてお話ししてみたいと思います。

先ず、概ねこの10年の道路に関する動きを見てみようということで、少し調べてみました。道路行政の組織や法律・制度の面で見えますと、平成13年(以降、平成をHと表記)1月に、一府12省庁への省庁再編により、建設省、運輸省、北海道開発庁、国土庁が統合されて国土交通省が設置され、国土交通省(本省)には北海道局が置かれ、北海道開発の推進に関する事務を担当することとなりました。H17年10月には道路関係4公団が民営化、また、研究機関である北海道開発土木研究所は、H13年4月に独立法人化、H18年4月に(独)土木研究所と統合となり、その一組織である寒地土木研究所となりました。

また、「道路整備五カ年計画」は、国土交通省の他の8本の事業分野別長期計画と併せて「社会資本重点化計画」(計画期間：H15～19年度)に統合されました。

H18年12月には、国の道路特定財源については、これを見直し、真に必要な道路整備は計画的に進めることとし、H19年中に今後の具体的な道路整備の姿を示した中期的な計画を作成する、現行税率は維持する、税金金額を道路整備に当てる仕組みは改め、H20年の通常国会

で所要の法改正を行う、毎年度の予算で、道路歳出を上回る税金は一般財源とすることなどが閣議決定されました。

また、北海道に関しては、H18年12月に、「道州制特別区域における広域行政の推進に関する法律」が成立し、開発道路が2級河川などと共に、国(北海道開発局)から道庁に権限が移譲されることとなりました。

また、H18年5月に決定された公務員の総人件費改革「国の行政機関の縮減方策について」において、北海道開発局の定員がH18年度から5年間で1,003名純減することが決定されました。

これから、H13年の橋本内閣による省庁再編以降、小泉構造改革を経て、戦後の昭和20年代中・後半に作られ道路整備を担ってきた組織や仕組みが大きく変化してきているのが見て取れます。

一方、北海道の国道整備の進展を見てみると、高規格幹線道路の整備はH18年度末で供用率が43%となり、その内、一般国道の自動車専用道路5路線については、日高自動車道・苫小牧東IC～沼ノ端IC間のH10年3月開通を初めとして、H18年度末で178km、供用率40%と高速交通体系の整備が進んでいます。また、H10年6月には、室蘭港を跨ぐ白鳥大橋が完成供用されています。

H16年1月には、高速道路整備に、国と地方の負担による直轄(国土交通省)において整備する「新直轄方式」が導入され、現在、北海道の4区間、縦貫道(七飯～大沼間及び士別剣淵～名寄間)と横断道(本別～釧路間及び名寄～北見間)が、これに切り替わっています。

次に道路防災対策の面で見ると、H8年2月の豊浜トンネル崩落、H9年8月の第二白糸トンネル崩落、H12年3月の有珠山噴火、H13年10月の北見北陽斜面崩落、H15年9月の十勝沖地震やH15年日高地方を襲った台風10号、平成16年の大森大橋落橋をもたらした台風18号、そしてH16年1月に道東の北見、網走を襲った記録的な豪雪など、様々な災害が発生した10年でもありました。豊浜トンネル、第二白糸トンネルの崩落を契機に、北海道開発局により大規模岩盤崩落対策をはじめとした防災対策が重点的に進められたほか、道路防災ドクター制度

や道路管理者、防災関係機関の防災情報共有化の取り組み、また、これに地方自治体や地域住民を含めた地域防災協力体制の整備・充実への取り組みなど、ハード、ソフトの両面から防災対策が重点的に進められた10年でもあったと思います。

また、道路管理において、情報化、IT化の進展と相まって道路管理用の情報通信ネットワークの整備が進められ、H17年度末までに、道路情報ボックスは34路線3,450kmの整備が進み、リアルタイムの道路情報が道路情報板などを通して提供されるなど維持管理の高度化が進展しました。また、ソフト対策としてH11年に開設された、道路管理者監修のもと（独）土木研究所寒地土木研究所が運営を行うインターネット・ホームページ「北の道ナビ」や「道の駅」情報端末機で提供されている道路情報、画像情報は、道路利用者に大いに利用されています。

また、交通事故死者数については、H17年に、14年ぶりに（過去13年間全国ワーストワン）全国ワーストワンを返上（全国4番目）し、H18年は全国ワースト2ではありますが、その死者数を減じており、関係機関のご努力に敬意を表したいと思います。その中で、北海道におけるランブルストリップスの導入は大きな効果を発現したと思います。

H5年度に制度が発足した「道の駅」は、H19年3月現在、北海道において100駅が登録され、道路利用者にとっての休憩機能としてばかりではなく、地域振興、観光振興に大きく寄与しています。また、「みち」をきっかけとして、地域発案の下、地域住民と行政が連携し、地域資源の保全・改善により「美しい景観づくり」「活力ある地域づくり」「活力ある観光地づくり」を行う「シーニックバイウェイ北海道」がH17年3月から制度としてスタートし、その展開が期待されているところです。

北海道の国道整備は、この10年で着実に進展して来ており、行政の方々、そして建設業界をはじめとする関係各位のご努力の賜物と敬意を表す次第です。しかし、一方で、道路予算については、橋本内閣以降の事業費抑制方針のもと漸減基調が続き、H15年度から5年間で15%の総合コスト縮減を図る「公共事業コスト構造改革」が進められるなど、量的にも質的にも、その厳しさを増してきております。また、北海道を取り巻く環境を見ると、人流・物流のほとんどを自動車交通に依存する中で、生活機能の圏域中心都市への依存、進行する高齢化と地方部での医療過疎、札幌への人口集中、自然災害の多発など大きな変化を見せています。こうした中で、高規格幹線道路のネットワーク化、空港・港湾へのアクセス機能強化、冬期交通障害対策、都市部の渋滞対策、既存ストックの延命化対策など、北海道の道路整備はまだまだ多くの課題を抱えており、これらの早期整備が強く求められています。

その意味で、国の道路特定財源の見直しにあたり、今

年中に策定される道路整備の中期的計画に、北海道に必要な道路整備が適切に盛り込まれるよう切望しているところです。

さて、当センターは、主に北海道開発局からの受託業務のほか、公益事業として、北海道における一般国道等における道路施設の合理的な維持改善、道路情報の提供、道路空間の有効かつ適正な利用その他道路管理全般に対する調査・研究、技術開発、道路愛護思想の普及、道路美化事業などを行うことにより北海道総合開発の円滑な展開に寄与することをその設立目的としておりますが、公益事業をもう少し具体的にいえば、学識経験者を委員とする道路管理技術委員会を設置し、道路管理に関する行政ニーズをテーマとして、調査・研究を進めているほか、北海道の「道の駅」、「道路防災エキスパート制度」、「北のみち普請を育てる会」等の各事務局を担い、その活動の展開に寄与するとともに、本技術情報誌「北の交差点」の発行、道路防災講演会等の講演会、講習会の開催などの事業を展開しております。

しかし、昨年6月に決定された政府の「随意契約見直し方針」、国土交通省の「建設弘済会への業務委託の在り方検討委員会方針」により、「民間にできることは民間に委ねる」との視点に立った公益法人への業務委託の見直し、民間出向者の見直しと随意契約から競争性のある契約方式（公募型企画競争等）への移行が実施されることとなり、当センターも大きな転換期を迎えております。

これにより、これまで受託してきた道路巡回業務などの一部業務は、H19年度から民間に移行予定で、一方、北海道開発局として定員削減計画を踏まえ、新たに工事積算補助業務の委託計画もあり、当センターとしては、競争性のある契約手続きを通じて業務を受託し、引続き公益法人として行政の補完、支援を行い、道路事業の推進に貢献するよう努力していきたいと考えております。

また、昨年6月に「公益法人改革三法」が成立し、早ければH20年10月からの施行が予定されております。これにより、法施行後5年以内に「公益財団法人」としての認定を受ける必要があり、そのための検討・準備を進めたいと考えております。

このように、時代の変化、行政ニーズの変化が大きく進んできておりますが、今後とも公益法人として、その役割を適切に果たせるよう努力するとともに、技術情報誌「北の交差点」で、北海道の道路管理に関する話題や技術情報を提供し、北海道の道路管理の進展に貢献できるよう引続き努力してまいりたいと考えております。

今度とも、当センターの事業にご支援・ご協力を頂きますよう、そしてまた、「北の交差点」をご愛読いただき、叱咤激励とご指導、ご協力を頂きますようお願いいたします。「北の交差点」20号の発刊に当ってのご挨拶といたします。